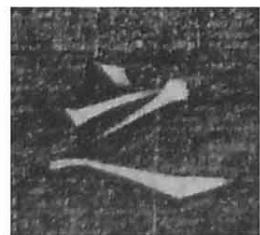


主図版「美人董氏墓誌銘・集字」

B群

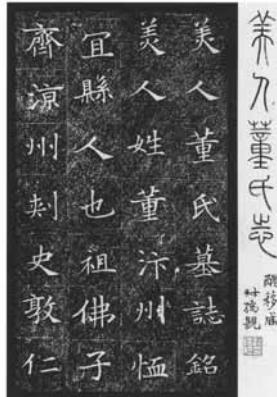


A群

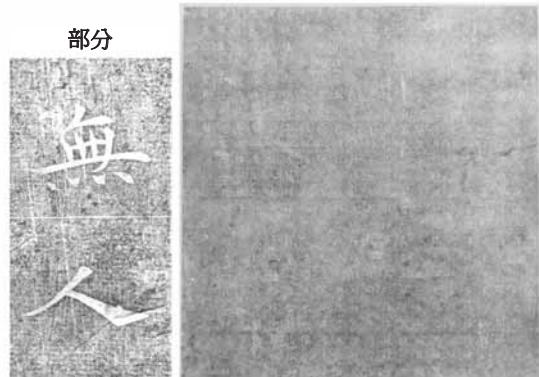
「落ち穂拾い記」②

『美人董氏墓誌銘』(下)

美人董氏墓誌銘・上海図書館本(図版③)



美人董氏墓誌・上海図書館本(図版②)



美人董氏墓誌銘・上海図書公司本(図版⑥)



美人董氏墓誌銘・上海博物館本(図版⑤)



美人董氏墓誌銘・個人蔵本(図版④)



拂蜀王美刀董墓中
龐生開基成良辰
蓋民占永春作
易夏賀嘉年七十六

『美人董氏墓誌銘』は、同時代の『蘇孝慈墓誌銘』などと小楷の名品と並び称されている。銘文の書風を仔細に観察すると、卷頭は実に整齊な結構で、起筆や終筆にも抑揚ある筆勢を見ることができ、初唐の楷書と見紛うほどである(主図版集字A群)。しかし整齊な結構の文字群の中に所々、バランスの不安定な結構の文字が見られる。右頁の集字図版の「天」字などは、第3画の左下へ払う筆画が短く、実に不安定な文字構成である。B群に示したのはこの種の文字である。右頁の図版は、A群の整齊な結構の書風との比較対照である。B群の文字は、前時代の北魏系楷書の名残を示しているのではなかろうか。原石精拓本を入手し、各種の影印資料など、あれこれ比較検討して得た見解である。この稀な拓本を入手してから、最近までに数件の『美人董氏墓誌銘』の名品と称せられる原拓本を見る機会を得た。その第一は、上海図書館所蔵の軸装の整拓本である。拓調は「蟬翼拓」の表現がそのまま当てはまる淡拓でありながら、文字の字画は、清晰で擦拓法で見事に拓されている(図版②)。その他に清末民国年間の名家・吳湖帆旧蔵の剪装本がある(図版③)。また、戦前に神州国光社からコロタイプ版で影印された吳昌碩題簽、名家旧蔵の美人董氏墓誌の底本の存在を教えられ、翌年、上海の個人所蔵本を拝見する機会を得た(図版④)。それを日本でカラー図版で全体を紹介することもできた。これも淡拓の精本である。他に上海博物館本(図版⑤)や上海図書公司本(図版⑥)などを目にした。近年のオークションでも2、3件の原刻拓本が売り出されている。ともに高価で今の私には手の出せる価格ではない。しかし、家蔵本は、こうした名品等と比較しても拓本として見劣りするものではないと思つている。

伊藤滋(書齋名・木鶴室)

書道芸術院

令和の群像（2021）



第72回毎日書道展出品作「いつくしみ」

大町青蓮書



大町青蓮

「ひたむきに」

小学校2年生の時、父から一本の羊毛筆を渡され、毎週土曜の午後は父の指導によるお習字の日と決められた。冬にはしもやけができる手で墨を磨る日もあった。が、教員をしていて何事にも厳しい父はどんな時でも、休むことを許さず中学3年生まで父の指導が続いた。そして父の勧めで大内魯邦先生の勤務されていた高校に入学した。

選択科目は迷わず書道。部活も書道部に入部。後日、他の先生から私の入部を魯邦先生が喜んでいたと聞かされ、俄然やる気が出たのを覚えている。古典や書道史について学ぶ中、先生が筆を運ぶ時の呼吸を間近に見たときはまさにカルチャーショックだった。先生が、書道部員の前で、大きな紙に太い筆で墨象を書かれた時の感動が、何の抵抗も無く「前衛」を始められた原点だたと思う。

魯邦先生は以前、月間誌『墨』の対談で「前衛から入った私は書を深めるためには

古典の臨書もやらなくてはだめだ」ということに気がついた。そして両方が影響し合ってさらに前衛の書に入っていた。私は絵も描くが書は端的に心の動きが出てくる感じがする」と語っている。口数の少ない穏やかな先生であったが、作品に向き合う時の先生は厳しく、私は古典の臨書の大切さ、また楽しさも学んだ。

先生が他界された後、千葉蒼玄先生にご指導を受けた。古典を基に前衛や近代詩の創作についての学びは衝撃的で、私の現在に繋がる新しい世界を開いていただいたと思っている。さらに20年前に伊香保で前衛書の勉強会が行われた時、浜谷芳仙先生の作品で使われている墨に魅かれご指導を賜った事も大きな前進で今に繋がっている。

私は感動、琴線に触れた事あるいはその時々の心情をモチーフに表現してきた。甲骨文の紙面を切るような鋭い線、篆書の造形、隸書の筆法等々それらを瞬時に使い制作する時間は緊張感の中にも楽しさを感じる。奥が深く学ぶ事の多い古典。「ひたむきにひとつものを押しすすめいやかばよろしゆきつかずとも」という大沢雅休先生の歌を指標に、これからも牛歩の如く一步踏みしめながら進みたいと思っている。

昨年12月大雪が降った日、書の道に進むきっかけを作り、ずっと見守ってくれた父が他界した。掲載作は慈しみ育ててくれた父への感謝の気持ちと鎮魂の想いを込めて制作したものである。

古典の臨書もやらなくてはだめだ」ということに気がついた。そして両方が影響し合ってさらに前衛の書に入っていた。私は絵も描くが書は端的に心の動きが出てくる感じがする」と語っている。口数の少ない穏やかな先生であったが、作品に向き合う時の先生は厳しく、私は古典の臨書の大切さ、また楽しさも学んだ。

先生が他界された後、千葉蒼玄先生にご指導を受けた。古典を基に前衛や近代詩の創作についての学びは衝撃的で、私の現在に繋がる新しい世界を開いていただいたと思っている。さらに20年前に伊香保で前衛書の勉強会が行われた時、浜谷芳仙先生の作品で使われている墨に魅かれご指導を賜った事も大きな前進で今に繋がっている。

私は感動、琴線に触れた事あるいはその時々の心情をモチーフに表現してきた。甲骨文の紙面を切るような鋭い線、篆書の造形、隸書の筆法等々それらを瞬時に使い制作する時間は緊張感の中にも楽しさを感じる。奥が深く学ぶ事の多い古典。「ひたむきにひとつものを押しすすめいやかばよろしゆきつかずとも」という大沢雅休先生の歌を指標に、これからも牛歩の如く一步踏みしめながら進みたいと思っている。

昨年12月大雪が降った日、書の道に進むきっかけを作り、ずっと見守ってくれた父が他界した。掲載作は慈しみ育ててくれた父への感謝の気持ちと鎮魂の想いを込めて制作したものである。

書のひろば

理事長
辻元大雲

書道芸術院秋季展

無事樂

新型コロナウイルス蔓延の影響でまだ終息を見通せない中、本院主催企画展「書道芸術院秋季展」並びに併催の「書道芸術院推薦作家展」が10月5日から10日まで、東京銀座セントラルミュー
ジアム銀座とアートサロン毎日の2会場で開催された。

本院財団役員（顧問・理事・監事・評議員・参事）、院展名誉会員、参与会員（選抜）、2月の第74回書道芸術院展特別賞選考に合わせ選抜された作家（春華賞候補作家）、審査会員候補公募作家（330点、192名）より選考された秋季菊花賞10名、秋季俊英賞40名を合わせて154名の作品が第一会場のセントラルミニージアム銀座に展示された。

会場は前回よりややゆったりとした展示となり見やすい展示となつた。評議員の大作がなくなつたためと、出品点数を若干絞つた影響かと思われる。そのため袖も一本減らして会場にゆとり

本年より新企画として昨年までの部門別推薦を変更、全部門を通して15名を選抜した「書道芸術院推薦作家展」は、アートサロン毎日を会場として一人2

まの持ち幅で1～2点の作品を出品していただいた。会場の関係で作品寸法をあらかじめ希望調査の上、指定させていただいた。3×8尺、5×5尺、6×4尺、さらに2点組での出品など、多彩な形式で、会場効果も上々であった。

書道藝術院創立記念日講演会
11月23日上野精養軒にて

お寄せいただければありがたい。
詳細は別記開催報告をご覧いただき
たい。

秋季展授賞式風景

し上げていた台東区立書道博物館主任
学芸員の鍋島稻子氏に再度ご依頼して
開催する。

書道界全体にとって大変喜ばしいことであると思います。

成員とした日本書道文化協会が保持団体に認定されることは、会長として身の引き締まる思いであります。

は必ず事前に院事務局まで所定の申込用紙か、葉書FAXなど文書でお申込みいただきたい。定員になり次第締め切りとさせていただく。

当日前中は財団定例理事会が予定されている。諸行事、特に第75回展記念事業等を検討する。

なお、例年開催していた講演会後の懇親会は現下の状況により取り止めとさせていただく予定。ご了承を。

書道 登録無形文化財に登録へ
保持団体に「日本書道文化協会」

認定
10月15日文化庁、文化審議会文化財
分科会にて答申され、公表された。

正式認定は約2か月後の官報に告示されたときとなる。

井茂圭洞日本書道文化協会会長コメント(全文)

「この度、文化庁の文化審議会において、書道を登録無形文化財として登録し、日本書道文化協会を保持団体として認定するとの答申がだされました。

世界に誇る日本の伝統文化である書道が国の登録無形文化財とされることは極めて有意義なことであります。書道界全体にとって大変喜ばしいことであると思います。

また、我が国の代表的な書家を構成員とした日本書道文化協会が保持団体に認定されることは、会長として身の引き締まる思いであります。

今後は、書道の保持団体として書道文化の継承と発展にさらに尽力することともに、ユネスコの無形文化遺産にも登録されることを目指して精力的に活動してまいります。」

答申内容は別記（50ページ）を参照していただきたい。

日本書道文化協会

・創立 令和3年8月26日

・発足時主要役員組織

会長 井茂圭洞

副会長 黒田賢一、高木聖雨

常務理事 新井光風、石飛博光、土橋靖子、仲川恭司、星 弘道、真神魏堂

理事 事 岩永栖邨、高木厚人、辻元大雲、中村伸夫

監事 遠藤 疊、風岡五城

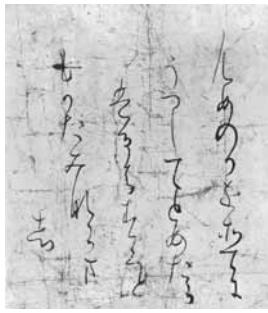
参与 4名

かな基礎基本講座(18)

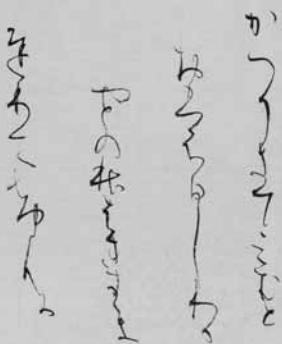
下谷洋子

かなの書式 散らし書き③

寸松庵色紙による創作への展開 I



1行目はほぼ垂直に下がり、2・3・4行目と少しずつ右へ傾いていきます。最後の一字がなかつたら、不安定になる傾斜ですが、この「志」一字で全体の均衡が保てています。行頭にくらべて行尾の高低は少なく、かといってきちんと揃ってもいません。



右の形式を基に試作してみました。文字や連続なども古筆の特徴を捉える“散書”というやり方もありますが、ここでは、それに拘らずあくまで書式を倣うくらいのつもりで書きました。

現代詩文書基礎基本講座(18) 小竹石雲

II 素朴、おおらかさを意識した作例

祝文 十五夜の遍く大地照らしけり
作者 中山幸子

①



帰り来て見むと思ひしわが宿の秋萩薄ぢりにけむかも
(万葉集)

- また字と字とがぶつかる自由さを升色紙を参考にした。
- 各々の文字造形にみる線の方向性にも自由さを求めた。
- くなつたか?

- 筆……超長鋒
- 素朴と言うよりおおらかさ、自由さを念頭に書いた。
- そのため、拡散(遠心力)する紙面構成にした。
- 動きも少し抑え気味にして素朴な感じをねらった。
- 淡墨にして、また字形もあまりデフォルメさせず、自然さに重きをいた。

書道芸術院秋季展

書道芸術院役員・審査会員選抜
審査会員候補公募

会期 令和3年10月5日(火)～10月10日(日)
会場 セントラルミュージアム銀座
アートサロン毎日

秋季展実行委員長
小竹石雲

衛生管理等の感染予防対策を講じ、
書道芸術院秋季展がセントラルミュージアム銀座及びアートサロン毎日で開催された。

新型コロナウイルスの感染の影響で会場に来られない方への配慮としてペーパーによる解説などの広報は昨年同様手厚く行われた。特に本年はその上にインターネットを通じ、院のホームページなどに動画配信を行った。

審査会員候補公募の審査にあたっては、熱意の感じられる作品、誤字等のチェックも入念に行われた。作品の向上は、平素の学書はもとより、書展へのチャレンジが大切。より質の高い作品を目指し精進してほしい。

154名の作品が展示された。(会場には選考委員の先生方に概評をお願いし、秋季菊花賞の皆さんとのコメントも配布した。)

秋季菊花賞40名の50名が選ばれ、総数154名の作品が展示された。(会場には審査会員選抜42名、審査会員候補公募は厳正な審査の結果、秋季菊花賞10名

方もあったが、出品者間での意見交換もなされ積極的な勉強の場となつた事は喜ばしい事であったと思う。(推薦作でも選考委員の概評が配布された。)

最終日は両展とも午後5時に閉会し、撤回作業も無事に終了した。関係各位のご労苦に対し感謝申し上げたい。来客数はセントラルミュージアム銀座が758名、アートサロン毎日が218名で合計976名でした。

感染症対策を講じた中での開催となり、まだまだ出品者も含めて地方の方の来場が少なかつた。

選出された15名による「書道芸術院推薦作家展」が開催された。書道芸術院推薦作家展は、若手の審査会員の育成の場として、今後院を支えてくださる前途有望な方々に登場して頂いた。残念ながら地方からは出席出来なかつた。

2021年 書道芸術院秋季展公募出品集計

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	秋季俊英賞	選外
漢字	127	75	4	16	55
かな	8	7	1	1	5
現代詩文書	96	60	3	12	45
篆刻・刻字	0	0	0	0	0
前衛書	99	50	2	11	37
合計	330	192	10	40	142



アートサロン毎日



セントラルミュージアム銀座

書道芸術院秋季展

会場 セントラルミュージアム銀座（紙パルプ会館）



〈佐々木信綱の歌〉

（公財）理事長・常任総務 辻元大雲

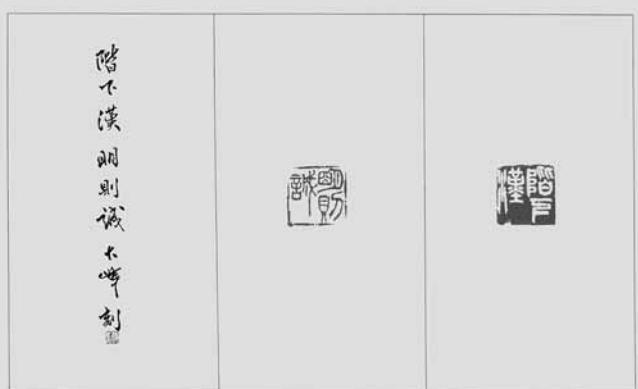
175×45cm

〈髪よりも〉

(公財) 常務理事・常任総務 下谷洋子



178×52cm



〈階下漢明則誠〉

(公財) 常務理事・常任総務 後藤大峰 70×100cm



〈朝焼夕焼〉

(公財) 常務理事・常任総務 小竹石雲 73×153cm

審査会員候補

秋季菊花賞

〈雨過竹侵〉



180×60cm

金子美千



120×90cm

市川将義

〈遠〉

〈三体詩(下)〉



田中一葉

165×53cm

177×58cm

〈秋日遊香積寺〉



半澤香艸



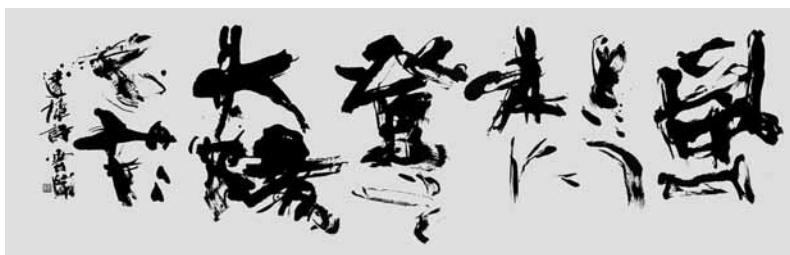
〈春日野の若紫のすり衣〉

高橋佳子 52.5×180cm



〈美しい獣猛〉

石崎甘雨 52.5×179.5cm



〈三浦達雄の詩〉

井上雲開 55×175cm

〈東山魁夷画文集 雪の山郷より〉



182×61cm

〈つなぐ〉



180×71cm

〈広げる〉



鈴木楽洋 91×121cm

廣瀬幸枝

A vertical calligraphy piece with large, expressive brushstrokes. The main text is 'つなぐ'. The composition includes some ink wash painting elements.

〈併催〉「書道芸術院推薦作家」展

会場 アートサロン毎日（竹橋・パレスサイドビル1F）

『大内熒軒』



240×90cm



180×60cm

〈五字句〉



175×112cm

〈老樹〉

『徳岡翠江』

〈驚博〉

『小林舟驥』

《西川翠嵐》

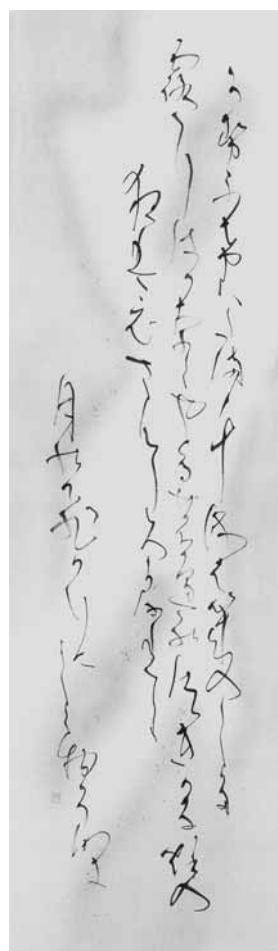
〈長恨歌一節〉



240×90cm

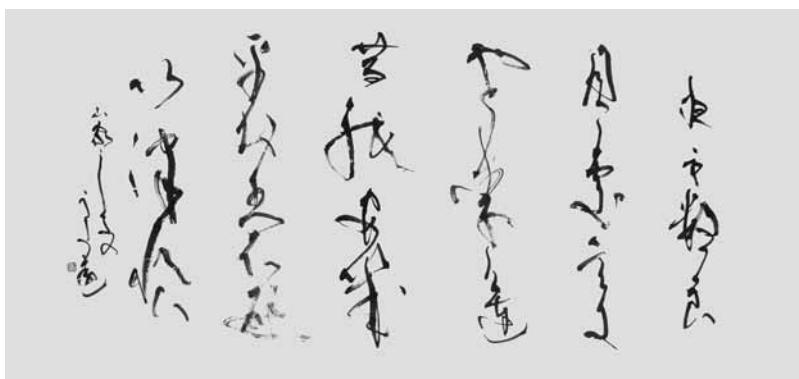
《利村郁子》

〈秋の月〉



180×60cm

《熊谷翔》



90×180cm

《西川藤象》



〈落葉微聞遠寺鐘〉

120×180cm

《木村笙園》



〈海の鼓動〉

150×150cm

《千田春月》



〈銀河鉄道の夜〉

70×138cm

〈述懷〉



〈述懷〉

100×130cm

《大 沼 樵 峰》



《早 坂 蔭 香》



〈スタート〉

《浅 野 彩 红》



《工 藤 山 房》



〈新による〉

伊都内親王願文 (平安・833年) ②

(伝) 橋逸勢

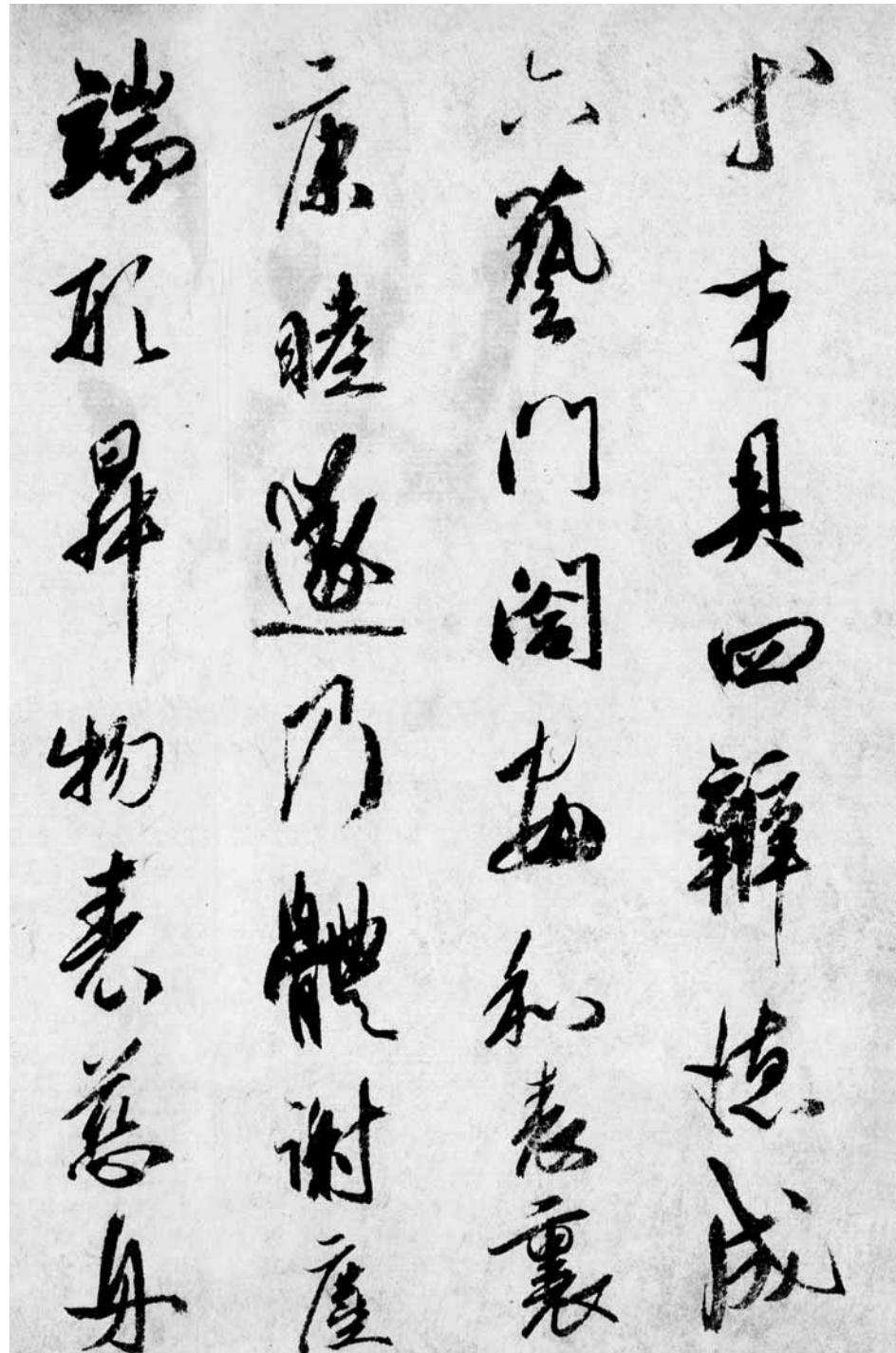
漢字研究部臨書課題

II (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

II (A. 大作の部) 普通葉書用・販賣サイズ以内、2×6尺・金額も可。当該古典の左記掲載部分以外も可。

B. 小品の部) 一切以降切以内・縦68×68(以降可) 縦横皆可。



宮内庁保管

(掲載図版・65%に縮小)

※落款を必ず入れる。
署名、もしくは○○臨
(押印のみ可)

〈解説〉 伊都内親王願文の書

においては、元来謹嚴端正に書かれるべき願文が、楷行草の各体を用い、氣宇雄大、自由奔放な運筆によって書かれ高い格調を見せており。また、俯仰法が巧みに駆使され、まさに毛筆の機能が最大限に発揮された名筆である。

なお、卷末の「伊都」の2字は本文と書風を異にして、小さくつましく書かれていることから内親王の自署と思われる。また、本文の25箇所の朱の手印も願意を強調すべく捺した内親王自身のものと推定される。

料紙は楮紙。縦29.6cm、長さ30.8cmの巻子本（全67行、534字）である。

(編集部)

等、才具四弁(辨)、徳成(六芸(藝))、門閣安和、表裏(康睦、遂乃体(體)謝庵)、端承(形昇物表)、慈舟

等

かな研究部臨書課題
特別研究部臨書課題

(半紙普通判(料紙可)・縦長に使用)
左記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。(全臨も可)
大作の部・毎日展審会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
△(当該古筆の左記掲載部分以外も可)▽

※掲載図版・78%に縮小

よみ 佐なぎさの院にてさくらの花を
みてよめる 利者ありはらのなりひらのあ可む
よのなかに尔多にたえてさくらのさか可む
ざらばるのこゝろはのどけからま
し だい志よみびとしらず須
あお者流多す毛
いしばしるたきなくもがもさく
らばなをりてもこむみぬ人
のため

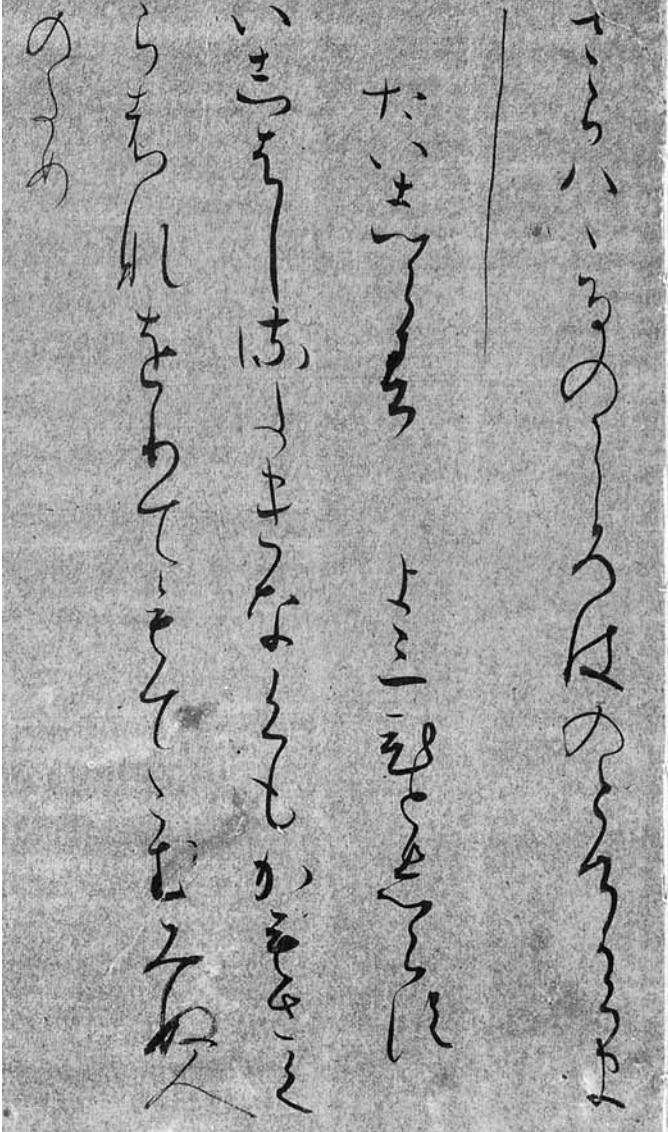
<解説>

関戸本古今集の筆者は零本末尾の中院
通村(江戸初期の公卿・1588~1653)の奥書で
は、藤原行成(972~1027)筆としているが、
それより後の11世紀後半のものと推定され
ている。

俯仰法を駆使した筆運びで、構えの大き
なゆったりとした字形、抑揚のきいた張り
のある線、自由で変化に富んだ連綿のリズ
ム、潤滑自然のままに展開する墨継ぎの妙
など、かなの美しさをいかんなく發揮して
おり、かなの技法としては最上位に位置す
るもの一つである。

(編集部)

※古筆は原寸(以上も可)で臨書しましょう。
○○臨(押印のみも可)



(個人蔵)

※落款を必ず入れる。
○○臨(押印のみも可)

小竹石雲

體露金風

(碧巖錄)



體露金風

よみ (体露金風)

書体=自由

「体露」はすべてあらわになること、「金風」は秋風。秋風に木の葉が吹き散らされ、隠れていた姿が見える、の意。

今回は行書で書いてみた。王羲之を根底において、字形、用筆面は極力自然で、質の高さ、発展性を内蔵したものになればと願って筆を執った。そのため左記のこと 注意を払った。

- ・自己の書における理念を持つこと。その一つには自然との調和があると思う。
- ・俗っぽくならない、表現過剰にならないことが大切。
- ・字形、運筆が健康的であること。そのための緩急の変化に情趣が加われば書く側、見る側も楽しくなってくる。

漢字規定秀級以下【十一月十日締めきり】用紙半紙普通判

前田龍雲選書

習い方解説 (二)

前田龍雲

志在千里
(志は千里に在り)
(曹操)

後漢末期の武将、曹操の詩「歩出夏門行」の一節「老驥懶に伏すとも、志千里に在り(年老いた馬は馬小屋の中で身を横たえながらも千里の彼方まで走ることを考えている)」に続けて、「心の熱い人間は、晩年になつても、壮大な夢を持ち続けているものだ」との意。

11月は書道芸術院創立の月、先達の精神に則りこの句を選びました。北魏時代に書かれていた造像記風の楷書を参考手本にしてみました。起筆・終筆・転折に特徴があり、歯切れ良い線で凜とした空気感が出せればと思いながら書きました。側筆の部分がありますが、単調な線にならないようにも心がけました。



書体=楷書

〈牛概造像記〉



志在千里 よみ(志は千里に在り)

かな規定 初段以上【十二月十日締めきり】用紙 半紙普通判(料紙可)

木村東舟選書

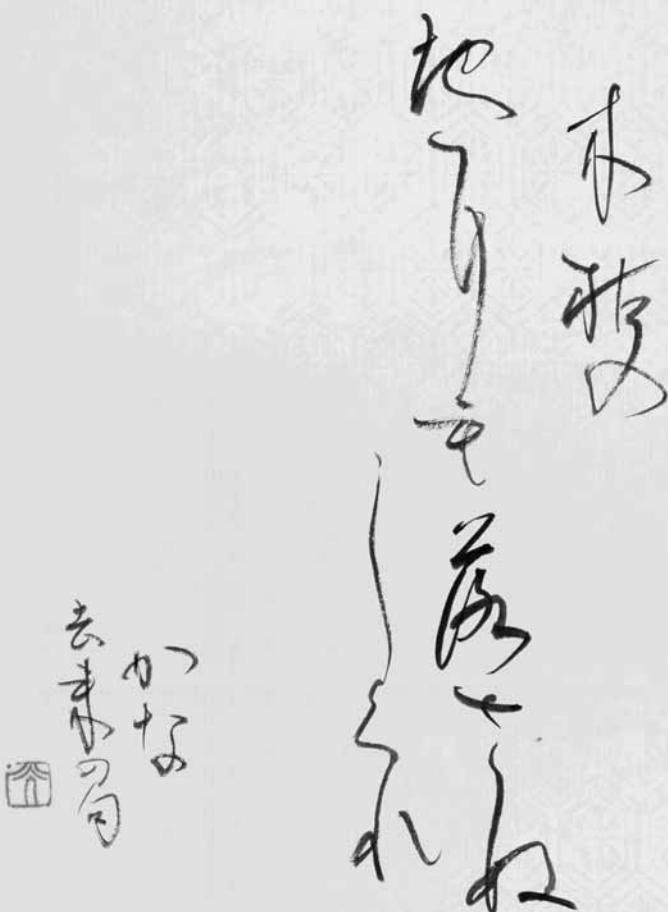
習い方解説 (二)

木村東舟

木枯の地にも落さぬ時雨かな

(向井去来)

「強い風が吹き散った木の葉を、
横殴りの雨が吹き飛ばしてしまつ」
ということを詠つた句。



俳句を書く時の心がけとして、句意を損ねないようできる限り、変体がなの使用を少なくしています。常に「言葉を書く」ということを念頭におき、理解しやすい文字で書きました。俳句は文字数が少ないのでも、字粒も大きめで少し太めの筆を使用しました。

紙面右に大きな塊を作り、中央を広く空け、左下を作者名を含めて小さな塊にしました。行と行との空間もそれぞれ変えて、全体のバランスを計ります。文字の大小、墨色等考慮し、魅力ある作品を目指しました。

* 料紙は半紙版(33.0×24.5cm)
を使用しましょう。

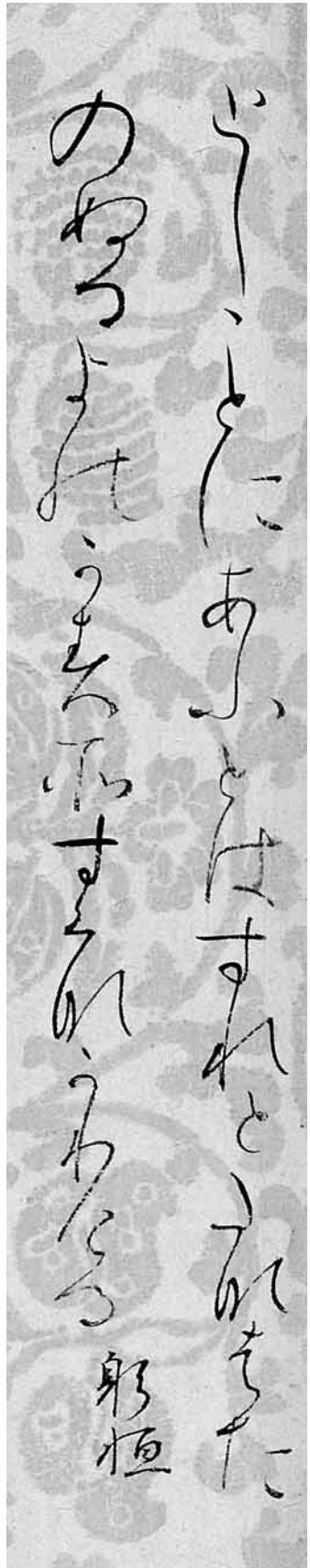
よみ方 木枯の地に(耳)も(毛)落さぬ時雨(し久れ)かな 去來の句

創作

かな規定
秀級以下
【十一月十日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ 〔料紙可〕(たて32センチ・よこ12センチ)

粘葉本和漢朗詠集

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿または単体を含む）を臨書する。



よみ方 としごとにあふとはすれどた(多)な(那)ば(者)た

のぬるよの(能)か(可)ず(春)ぞ(所)すぐ(久)な(那)か(可)り(利)け(介)る躬恒

習い方解説
(二)

かな条幅規定【十二月十日締めきり】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

佐藤希雲選書

佐藤希雲

すまのあまのしぶやく 煙風をいたみ

おもはぬ方にたなびきにけり
(よみ人しらす「古今和歌集」)

「須磨の漁師の塩を焼く煙は、

が強いために思いも寄らぬ方向

なごいでしまった」の意 恋

小筆（穂の長さ3㌢）を全部お
うして書いてみました。「おもはー

よみ方 須磨の海人の(能)しほ(報)やく(久)煙風をいた(多)み(美)

須磨の海人の(能)しは(鞠やく久)煙風をいた(多)み(美)お(於)もは(八)ぬか(賀)た(堂)に(耳)た(多)な(奈)ひ(日)き(支)に(一)け(介)り(里)

創作

出品券
貼付位置

*ヨコ形式に限る

で講義をしています。

「おもは」

漢字条幅規定 初段以上【十二月十日締めきり】用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹選書

習い方解説 (二)

名 越 蒼 竹

霞散浦邊雲錦截 月臨湖面鏡波開
（霞は浦辺に散じて、雲錦截ち、月は湖面に臨んで、鏡波開く。）
蒼竹

書体＝自由

行草書の流動性をよくする秘訣は、何でしょうか。いくつか考えられるなかで、最も重要な要素は、文字の傾斜だと思います。字形が長方形となるのを避け、菱形や平行四辺形に形作ると、文字が傾斜して不安定になり、結果として流れをよくすることができます。今月は横画の右上がり度が強い米芾の書風を参考に書いてみました。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定 秀級以下【十二月十日締めきり】用紙 小画仙紙半切

川島舟錦選書

習い方解説 (二)

川 島 舟 錦

玉露洗秋色

舟錦之

玉露洗秋色
(玉露秋色を洗う)
(蘇東坡)

書体＝自由

深まりゆく秋の気配や時の流れを立ち止まって感じるような余裕はなかった。やるべき事も「忙しいから…」に置き換えていた戻ることのない時間を使う。
世界中をパンデミックに陥れ、日常の生活も命をも奪い去られるコロナ禍にあって、自分自身の大切なこと」に思い至った。黄昏時の、ほんの小さなできごと。

小林琴水

迷いを断てば世界は変わる

迷えばすなわち濁惡の處、
悟ればすなわち清淨の処にて、無染の境なり。

(一)切経開題)

欲望を抑えつだけでも心は淨化される

琴水

書体=自由

迷いを断てば世界は変わる
迷えばすなわち濁惡の處、
悟ればすなわち清淨の処にて、無染の境なり。
(一)切経開題)
欲望を抑えるだけでも心は淨化される

空海「黄金の言葉」より

六道・地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・

人間道・天道の六つの世界は、迷いの世界です。「迷いの中にあるうちは、この世は汚れにまみれた場所であり、悟りに至れば、世界はシミ一つない清淨な場所に変わる、それを△淨土▽と呼ぶ」と空海は言っています。淨土は仏の世界、輪廻を離れた永遠の清淨な世界です。

△用紙 ハガキ大(14×10cm)の白紙を使用
△黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)
「注意!! 用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ(14.8×10cm)を守って下さい。」

〔訂正とお詫び〕
(26)10月号のペン字手本の中では、語句の誤りがありました。
訂正しお詫びいたします。
4行目「…衆生はみなこれもが…」は、正しくは「…衆生はみなこれわが…」です。
なお、「もが」「わが」とちらも出品は可です。

晩秋 立冬 ご壮健 冬の訪れを

晩秋 立冬 ご壮健 冬の訪れを

街路樹もすっかり葉を落とし冬の装いに

街路樹もすっかり葉を落とし冬の装いに

大平 邑峰

(楷書) 晚秋 立冬 ご壮健 冬の訪れを
(楷書) 街路樹もすっかり葉を落とし冬の装いに

(行書) 晚秋 立冬 ご壮健 冬の訪れを
(行書) 街路樹もすっかり葉を落とし冬の装いに

基本用語 「立冬」は四節季の一つで、冬の始まりを意味する。11月8日頃の時候の言葉。

◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓号を

(掲載手本90%に縮小)

◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可

◇所定の出品券を作品の右下に貼る <審査会員を含む誰でも出品可>

今月の

ホーリー作品 各部総評

No. 725

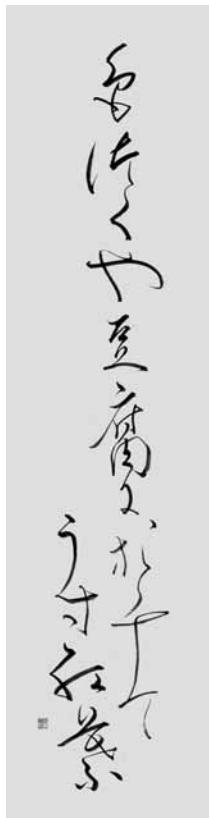
ペン字部 師範 鈴木 美帆
切れ味のよいペン使いでスケールの大きな作に仕上がった。名前まで丁寧で品格あり。

◎ペン字部総評 整齊な字形の作品が多く見えたが、誤字についてはよく研究されていたが、誤字にならないよう注意された。（仙草評）

夕空はれり秋風、ゆき
つゝかげ落ちる鈴虫鳴く
思えば遠い故郷の空
ああわが父母いかにおほす
唱歌・故郷の空、美帆書

かな条幅部 準師 岩瀬 祥園

伸々と運腕大きく、リズムも豊かで滑らか。転折の扱いが見事で美しい。紙に対する墨色も適格。◎かな条幅部総評 「於干」の連綿にじみの強い紙は不可。（洋子評）



現代詩文書部 特選 奥川 麗流

濃墨・超長鋒で、しなやかに淡淡と一貫したリズムで書き切っている。爽やかさを感じる。

◎現代詩文書部総評 現詩に取り組んで日々の浅い方は、写真版や作品集を参考にされたい。（宗苑評）



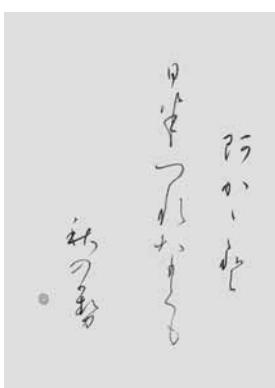
前衛書部 特選 西山 美龍

発想の展開が見事である。上下の太線と結ぶ細線の造形が、表情豊かに表現されて空間美を保った。

◎前衛書部総評 表現豊かで躍動感ある作品が多く意欲が感じられた。楽しんで制作を。（蓮紅評）

かな部 師範 松村 陽子
真摯に手本に向きあい掌中にしたものを独自の表現とした力量は見事。学ぶことの本質を教わった。
◎かな部総評 個性的な創作ができるとしている。さらには字粒墨量、墨色の研究を望む。（明子評）

漢字条幅部 師範 磯貝 清耀
羊毛筆を使い、巧みな筆法で構成はどこにスポットをあてるかと意識し創作してほしい。線質も大切だが字形にも注意。（藤扇評）



◎漢字条幅部総評 橫形式の作品ねばり強い渴筆を中心とした筆致が、ゆったりと横への展開のリズムと調和し、滋味ある作。

◎漢字部総評 書体自由の上級者は多様な表現が見られて楽しいが、行草の字形の工夫が今一つ。下級の楷書を含め努力を。（大雲評）

実用書優秀作品

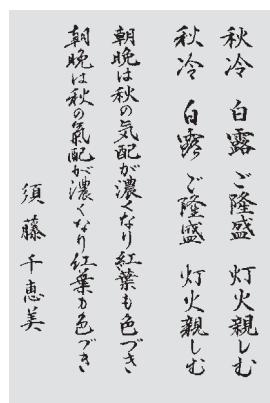
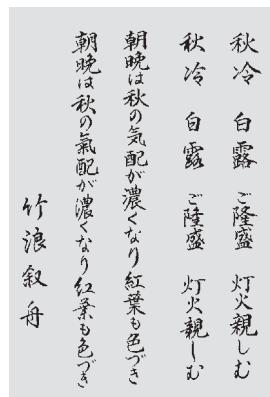
選評　辻元大雲

◎実用書部総評

標準的な安定感と筆使いの丁寧さが要求される実用書は、基礎力と基本的な文字構成力が試される。漢字とかなのバランスも重要。

(大雲評)

丁寧な筆使いで、バランスよくまとまっています。安定の作。



四生上	東竹紅瑠	佳	雲雀	A高崎	千若葉	大高雲	大紅瑠	千葉	楓会	白扇	大雲	特選
枝大里	東總扇佳	作	山雀	I中島	高木	金城	岩上	相澤	利守	天野	須藤千恵美	竹浪叙舟
奥太田	大薄田藍澤	作	山村	二通	高木	金城	坂上	磯貝	由佳理	白扇	千恵美	須藤千恵美
麗良子	よし子春白瑠	品賞	紫昌	麗子	佳智子	彩香子	清敷子	敦子	鷺山	美梢	白扇	須藤千恵美
秀華	華深芳蘭	秀立	八誠田	秀春汀	もく	宗苑	八街	千葉	玉川	うる	大雲	特選
猷祥	仙苑	精街和無	惠	惠汀	入	八街	八街	大雲	大雲	たか	大雲	特選
陳野原千鶴子	小菊地水潤	及川井伊	宇猪	荒阿上	青木	茂三浦	松山村	松林	浜野	清永	千葉	特選
(選外)	原492	及川井伊	石飯塚谷	部利	木	松木	松木	松木	佐藤	篠原	大雲	特選
妙華名氏名略	妙華名氏名略	信代裕	明峰白照	甘郁雅啓	藤津弘悠	紹水	峰生	峰生	楊流奈	蘭舟流奈	千葉	特選
(選外)	492	及川井伊	椿江街瑠	白	成森珠	高澄	深有	大墨洋澤	高橋	高橋	小洋澤	映
渡辺	渡邊	六波羅	吉田矢部	安富野	松保谷	廣林	中西	東鶴屋	多胡	武高安	須藤	鈴木
信代	信代裕	妙華名氏名略	紀香苑	真香苑	真香苑	美奈子	美岐	葵龍	三	花翔美帆	萩美帆	美帆
希仙代	希仙代	妙華名氏名略	香玲和	明峰白照	甘郁雅啓	翠子	樂翠子	亞蕙	千	源琴子	萩美帆	美帆
源琴子	源琴子	妙華名氏名略	奈芳美雪慧子	弘悠子	藤津江芳	和美枝	葵翠子	希仙代	花	翔美帆	萩美帆	美帆
雨	雨	妙華名氏名略	潤	子	江芳	和美枝	樂翠子	希仙代	希	希仙代	萩美帆	美帆

前衛書 (容洲社)
阿部邑里
「モラの旅」



阿部邑里書

174×79cm

◆超長鋒の筆先の瞬発力を活かした飛沫の使い方、渴筆とともに手慣れた作である。紙面明るく爽快な印象を与えていた。

(紅瑠評)

◆四つのブロックに自然に詩文を書き分け、それぞれに味わいがあり、詩情が伝わる。4段目の構成が見事。

(鄭雲評)

現代詩文書 (珠巳)
宍戸珠葉
「ゆきとらの詩」

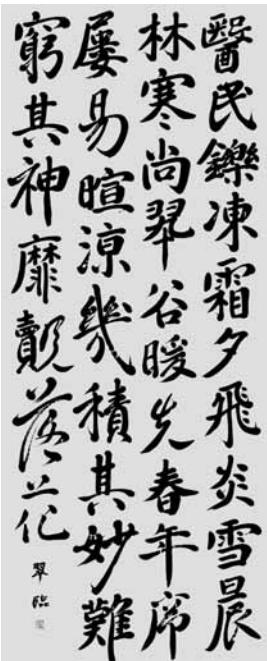


宍戸珠葉書

180×60cm

◆五言一句の構成、緩急のつけ方、太細とリズムよく一貫性のある作品となった。気迫が伝わる。(藤扇評)

臨書 (紅瑠)
金井みどり
「温泉銘」



金井みどり臨

171×70cm

◆温泉銘は奔放自在でいて、織細巧妙でバランスのとれた書。その心持ちは表現された。丁寧に仕あげた。

(藤扇評)

漢字 (静心書道会)
田中岳舟
「早秋雨后晚望」



田中岳舟書

180×53cm

創作の部(32点)	漢字 - 5点
臨書の部(25点)	漢字 - 23点
前衛 - 17点	かな - 4点
現代 - 6点	かな - 2点

創作の部(32点)	漢字 - 5点
臨書の部(25点)	漢字 - 23点
前衛 - 17点	かな - 4点
現代 - 6点	かな - 2点

創作の部(32点)	漢字 - 5点
臨書の部(25点)	漢字 - 23点
前衛 - 17点	かな - 4点
現代 - 6点	かな - 2点

創作の部(32点)	漢字 - 5点
臨書の部(25点)	漢字 - 23点
前衛 - 17点	かな - 4点
現代 - 6点	かな - 2点

〔漢字〕		〔漢字〕		〔漢字〕		〔漢字〕		〔漢字〕		〔漢字〕	
華祥	小泉	英峰	吉瀬	紅瑠	相澤	篤信	三浦	紅瑠	佐藤	一弦	工藤
樹原	紺野	千葉	竹浪	珠光	栗原	篤信	朱鳳	成美	和香	和香	和香
青山	遊山	青山	遊山	珠光	りか	三浦	朱鳳	成美	潤	潤	潤
熊谷	遊山	千葉	遊山	珠光	珠光	朱鳳	朱鳳	成美	潤	潤	潤
「かな」											
千葉	平野	千葉	平野	千葉							
「かな」											

漢字研究部
(温泉銘)

選評 川島舟錦

今月のホープ作品



佐藤祥扇

漢字研究部 特選 佐藤祥扇

リズムにのって伸びやかに書く」ということは、至難の業です。

今回の課題は、特に「ゆったりのびのびと

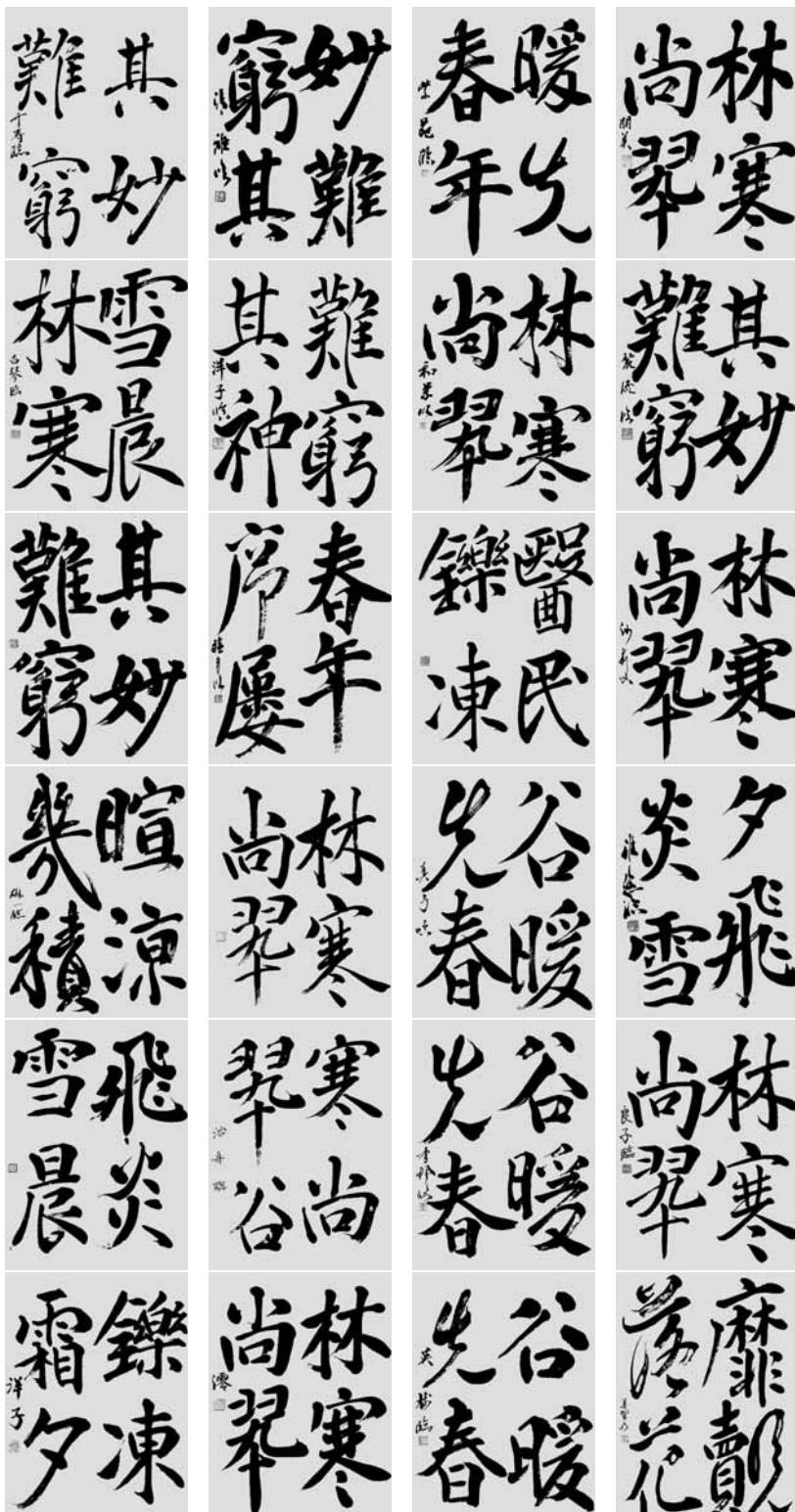
まずは、形を捉えてのびやかに書けるということだと思います。比較的柔らかい筆で王羲之を意識しながら力むことなく臨書できました。

落款も、なかなかのものです。

◎漢字研究部総評

半紙に臨書するときも、大きな紙にそれぞれ作品化するときも「筆の弾力を利かせて、

意識しながら、大らかなリズムを掴んで「抑揚をきかせて」などなど。やっぱり普段の生活の中に、練習時間は必要ですし、不断の努力のようです。自戒を込めて。



洋百雄舜白竹
子雲一水琴寿

治春睦洋清
舟台月子雅

英香真和和紫
樹柳弓美栄苑

美良雅沙麗朋
翠子悠莉流美

か な 研 究 部
(一条攝政集)

選評 庄 司 紅 郷

今月のホープ作品



松丸愛石

かな研究部 特選 松丸愛石
連綿線が見事に自然の流れとして表現でき、完成度の高い作品となりました。筆先に力を込めて、緊張感を失うことなく書けています。

有玉真 和和和 耶由佳 遊幹雅
希砂子 子美枝 衣子惠 山生泉

文化庁報道資料

解説

〔登録無形文化財の登録及び保持団体の認定〕

日本書道文化協会

(1) 登録無形文化財の登録について

- ① 名称 書道
② 登録無形文化財の概要

書道は、毛筆を用いて言語を表記する表現行為であり、漢字、仮名、漢字仮名交じりによる表現のほか、篆刻も含まれる。書道では、文房四宝（筆、墨、硯、紙）をはじめとする多様な用具用材を用いながら、優れた書の臨書を通じた書法の習得に始まり、それを追究、応用することによって、高度に美的な表現を創出してきた。

歴史的には、漢字の伝来以来、中国の優れた書から書法を吸収、技法を工夫していく中で、平安中期以降、和様と称される漢字の書風が生まれ、また、和歌文化の隆盛とともに仮名の書が発展した。仮名の書においては、散らし書きや漢字の手法を発展させた連綿の技法を用いて、装飾料紙等に特有の表現が展開された。これらの中で優れた書は、後の時代に名筆として重視され、単に典籍の写本としてだけでなく、文字や書法を学ぶ為の手本として、また、鑑賞の対象として尊重されてきた。さらに、江戸時代になると伝統的な書法が庶民層にまで受容されるようになった。

このように、書道は時代が下るにつれて手習いの実践と、目習いとも呼ばれる鑑賞の蓄積によって広く生活の中に受容され、浸透してきた。そのため、現代における優れた書の表現にも伝統的に育まれてきた美意識を見てとることができる。

以上のことより、書道は、生活文化に係る歴史上の意義を有するとともに、芸術上の価値が高いものである。

③ 登録の要件

- 主な要件

 - 一 文房四宝（筆、墨、硯、紙）の使用を原則とすること。
 - 二 伝統的な書法によること。
 - 三 次の分類に応じた書表現を行うこと。
 - 漢字の書
 - 仮名の書
 - 漢字仮名交じりの書
 - 篆刻

(2) 保持団体の認定について

① 保持団体

日本書道文化協会

古代
表
者
会長
井茂
雅吉
(号
井茂
圭洞

全国書美術振興会内
事務所の所在地 東京都港区赤坂2-11-1 デルックス酒井川王

② 保持団体の概要

日本書道文化協会は、書道の伝統的な書法を受け継ぎ、未来へと継承していくために、その書道の技の保存と向上を図る目的で、伝統的な書法の技を受け継ぎ、継承者を持つ書家を正会員として令和3年に設立された団体である。

書道界には、漢字、仮名、漢字仮名交じり、篆刻それぞれを専門に活動を行ってきた団体があり、そうした団体が、これまで長年にわたり書法の継承や普及・発展、後進の育成等の活動実績を積み重ねてきた。日本書道文化協会は、それらの団体を代表する書家が主たる構成員となり、会派を超えた組織として結成されている。同協会は、これまでの各団体の活動の枠を越えて事業を行うことにより、書道の保護と発展に貢献することとしており、その規約には、伝統的な書法の保存に関するここと、書道文化振興のための展覧会、講習会、研究会の開催事業等を、目的を達成するための事業として位置づけ、活動に取り組んでいる。

以上のように、同会は、登録無形文化財の保持団体として適切な団体である。

何はともあれ、この登録（来年4月ごろ）によりユネスコ無形文化遺産登録への機運が高まることは間違いない。（辻元大雲）

ただし、登録の要件として挙げてある、「一の文房四宝は当然として、二、伝統的な書法によること、三、漢字・仮名・漢字かな交じりの書」の記述が問題である。本院の特色としての「前衛書」「一刻字書」の記述が取り上げられていない。概要にある「現代性」や「芸術上の価値」の中に広く含まれる表現領域と解することもできるが、文部科学省、文化庁の主管する制度下にあっては、現状としては無理なのかも。高等學校の習指導要領では、「前衛書」は取り上げられてはいるが、「前衛書」は文言で登場しない。今後の大いに重要な問題点としてとらえておく必要がある。

上記が今回文化庁から発表された報道資料である。登録無形文化財登録のための必須条件が、登録対象ジャンルのための「流派」に偏らない、会員登録による「保持団体」が主務機関（文化庁）から認定されることであり、今回の書道を「登録無形文化財」に登録するための「保持団体」として、「日本書道文化協会」が本年6月9日の設立準備会を経て、8月26日に急遽設立された。

本年4月16日には改正文化財保護法が国会で成立、4月23日公布されてから、国の動きに対応するためであつた。

上記の概要にある通り、時代と共に

(補足説明)

●篆刻

【十一月十日締めきり】

〈出品規定〉審査会員を含む、誰

でも出品可。

①篆刻

(ア)課題による語句
(イ)原印自由
(出品の際、原印のコピー添付)

②創作 語句自由



11月号 篆刻課題

- 印面の大きさは3.4cm（八分角）以内とし朱文、白文自由。
- 印箋は市販のもの、半紙横½の大きさに切ったものも可。
- 創作、篆刻とも応募は一人一点。

◎出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の記文を明記、並びに落款（氏号）を入れる。

(篆刻)	
特選	小沢華仙
佳作	(60音)
入選	(60音)
(選外なし)	

(創作)	
特選	大沼樵峰
佳作	(60音)
入選	(60音)
(選外なし)	

定価 一部 七五〇円

令和三年十月二十五日印刷
令和三年十一月一日発行

編集兼
発行人 辻元洋一（大雲）

データ処理
印 刷 株式会社リンクス

発行所 小沢写真印刷株式会社

公益財団法人書道芸術院

東京都千代田区東神田一丁目六七

電話(03)3861-1954 FAX(03)3862-1957

振替 00150-4115055/

ホームページ http://www.lmsco.jp/shohei/

<特選>



「鶴身」

篆刻



「傾河」

創作

725号篆刻優秀作品

選評 後藤大峰

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

東京都千代田区
東神田一丁目六七
東神田プラザビル三階
101-0031

電話(03)3861-1954 FAX(03)3862-1957
※お問い合わせ、ご連絡は、
月曜日～金曜日九時～十七時の間
にお願いします。(土・日・祝日は休む)

コロナ禍の中、当分の間十時～
十六時に時間の変更しております。

1部～9部までの1回の郵送料
一か月の購読部数が

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円

10部以上は
送料免除